

学生研究室からのたより

情報行動科学学生研究室

情報研究室の位置はプレハブC棟の2階で、総科大講義室からテニスコートの南端をプールの方へ歩いて2つめのプレハブの階段を上がってすぐである。

この説明を読んでも分からない人は学生便覧の最後をどうぞ。

他に情報行動のⅡ・Ⅲ群の人のたまり場となっている実験室等がある、それは、同じプレハブの1階にある。

大きさはふつうの教室と同じくらいで、1年生の研究室のおよそ $\frac{1}{2}$ から半分ぐらいの大きさと思う。

ロッカー及び机等は人数の関係上2年生はもらえないと思うので注意しよう。

続いて研究室の内部に話を移そう。

研究室には意外と本が多く、アカデミックな感じもするが $\frac{1}{4}$ ぐらいはマンガ本なのでヒマつぶしもできる。(最新号がないのが残念……筆者注)

さらに、コーヒー等が作れる設備があり、床にはカーペットが敷いてあるので居心地はまあよい方である。

しかし、この研究室も2年生のロッカーがない事や2年生がほとんど環境の研究室へ集まっている事などで、特に2年生の利用状況がさっぱりと言ったところだ。(こういう私も実は2年生なのです。)

しかし環境の研究室と言っても広さは情報研究室と同じなので、今は2年生の一部が常連として使用しているだけのようだ。

そして、そのような状況に加えて、現在、研究室を穿孔機室の一部に移そうという話もあります。研究室の移転は情報行動科学コースが定員いっぱいである事などから教室や卒論につく4年生の部屋が不足していることから起こった話である。

しかし今現在の学生側の意向として穿孔機室のような条件の悪い部屋には、他の部屋へ移動の見通しがつくまで移動できないということが確認されている。(編集部注：現在は他の部屋に移転した)

以上が情報研究室の実態です。

次に私たちが研究室をいかに利用していったらよいかを考える上での私個人の提案を述べてみたいと思います。

まず、自分なりに、研究室を他の教室と異なる研究室として成り立たせる主要な要素として、下の3つをあげてみました。

1. 授業以外の目的で自由に使用できる空間がある。
2. それに付随したいろいろな設備がある。
3. いろいろな人が集まって、コミュニケーションが成立する。

当然3つそれぞれに利点がありますが、1, 2について言えば、大部分の利点は福利厚生的分野に属するという観点等から、研究室を特徴づけ、その利用の良し悪しを決める要素として「いろいろな人が集まって、コミュニケーションが成立する。」を考察していきたいと思います。

次に、実際コミュニケーションの成立があった例として、私は52生・53生が1年の時(特に後期)研究室を利用して大学祭参加やその他のいろいろなコミュニケーションというべきものを持っていたという事を知っています。

また他の研究室でも人と人とのふれあい等は散発的に実現されているようです。

しかしこのようなレベルのコミュニケーションだけでは、はっきり目に見える成果がないので、人によってその価値判断がさまざまになっています。その結果「私は人と人とのふれあいを大切にしたい。」という人から逆に「そんな事をするヒマがあれば図書館or麻雀に行く。」等いろいろな意見の対立をまねいていると思います。

しかし、いろいろな人と本当に深い話し合いをするということは、互いに自分の欠陥を認識したり、異なった面でのものの見方を身につける等を通して、互いに能力を高めあうという主要な側面をもっているし、また、それには、本などの情報では得られない深いものがある。

以上のような理由から、先にいったようなコミュ

ニケーション等によって絶えず自分の問題を互いにぶつけあい、そして自分なりに最善のものをもってどんな研究あるいは仕事をするか少しづつ絞っていくのが特に学際領域的研究分野を開拓する総科生として大切なことではないだろうか。(私は、それよりもまず一個の人間として大切なことであると思うのだが。)

そしてそれを実現発展させる場所として、研究室が最適であると思うし、そのような立場から今の1.2年(情報行動科学コース志望の人)の人に研究室に来るなりしてもらいたいし、そこでサークル的活動や勉強会を行なったり、いろいろなくふうをこらして、その実現の第一歩としたい。

(52生 糸井)

社会文化学生研究室

その1

社文研究室はテニスコート側のプレハブ二階、森教官室の隣にあり、唯一社文学生の溜まり場となっている。とはいっても、いたって学生の利用が少なく、各学年の一部が日常的に利用するのみである。しかし図書要求に端を発した社会文化学生図書委員会の活動の進行をあいまって、その利用も著しくなってきたようである。

研究室の利用が、必ずしも学生の学問への情熱や集中度を示すものではないが、社文学生としての自覚や紐帯がなくなってゆくことは、学生自身にとっても、コースにとっても重大な問題であり、研究室にかかわる様々の問題は、実は学生に関しても多くの問題をなげかけている。およそ学生における学問には、その自主性が不可欠であって、自主性、自発性をなくして、それは成り立ちえまい。しかし、受験体制下に育った我々が、目も耳も口もふさがれてきて、やっと時間的に精神的に、人格の開花に向おうとする時、再びそこにしめつけがなされる時、もはやそこには学生の自主性も学問うんぬんも崩壊する。研究室のことを考える時、常にそうした次元に立ちかえるのを禁じえない。飛び立つべき鳥が、その翼がもぎとられる時、いったい鳥としての価値があるだろうか。

その2

では研究室、社文学生にかかわる問題とは何か。今一度繰り返すならば、研究室は学生に“開かれている”必要があるのではないか。その使用法、管理等については、学生図書委員会を中心に対処したい

つもりである。設備、時間等、もっと学生自身が自主的に利用できるようにしたい。一時停滞的であった学生の動きは、図書要求やスポーツ大会等を機会に活発になってきた感がある。勿論それは全体からすれば一部ではあるが、こうした傾向は運動論組織論と、かかわるもので、広く学生に訴え自覚を待つしかない。

その3

ちょっと話がかたくなって申し訳ないが、結局「研究室について」とは「社文学生について」に他ならない。他コースとの学生交流が少ないので、来年度社会文化コースに進む一年生諸君に参考にされたいと思う次第である。さて最後に、現在2・3年中心に強力にすすめている活動に、「図書要求」があり、学生図書委員会の責務としている。手前味噌ではあるが、少々委員会について書いてみたい。現在の活動の中心は、書籍請求用のリスト作成である。社会



文化コースに計上されている書籍関係の予算が昨年より繰りこされているので、これを利用するというわけで、数ヶ月来遅延しているのを、リスト作成を急ぎ11月いっぱい請求し、53年度中に研究室に入るように努力している。委員会の活動は単に書籍要求にとどまるのではなく、社会文化コース全体にわたって学生の自主性が発揮されるように努めている。このことについては、教官及び図書室の全面的な協力を得て進めてゆくつもりである。あらためて紙面を拝借し、その御協力に感謝するとともに、学生諸氏の自覚と参加をお願いしたい。

(51生 大西正己)

環境科学学生研究室(2年)

環境の研究室は、誰が何をするためにあるのでしょうか。また4月以来、我々環境の二年生のはたして何人が研究(少し大げさですが)のために利用したでしょう。もっとも、地域や社会のように参考書類

は皆無で、本棚には大学生の必読書（少年チャンピオン、マーガレットetc）しか置いてありませんが、環境の二年生諸君、もっと有効に研究室を利用しましょう。

さて、それでは現在の研究室の実態はと申しますと、環境の学生は角で小さくなり、一方SSA（総科スポーツ愛好会）の諸君が、自分達の部屋の如くロッカーを使用し、他コースの二年生も休みには数多くたむろしています。そして部屋の中を見回しても、研究室というより休息室という印象を強く受けます。つまり我々の研究室は、52生全員の集会所としての方がよく利用されています。その関係上、先日の大学祭、また他のいろいろな企画の話し合いや相談が行なわれる場所になっています。二年になり、各コースに別れても昨年同様に、52生が集まる場所がある事は、数多くの面でたいへん便利です。しかし、始めにも少し触れましたが、環境の学生の利用が今一つ活発ではありません。せっかく環境の学生のために設けてあるのに。

では次に、研究室の中をもっと詳細に報告してみましょう。まずロッカーを見て不思議に思う事です、地域や社会の学生の名が堂々と書いてあり、SSAのロッカーがやたらとたくさんあります。SSAのロッカーには、どこから持って来たのかバレーボール、ハンドボール、サッカーボール、そしてラグビーボールに至るまで多数の運動用具が備えてあります。でも皆さん、彼達が練習している姿を見た事がありますか。

目新しい物と言えば、今夏に扇風機が入ったことです。プレハブの為、夏は非常に室温が上昇し、まるでサウナのような所ですから、年寄りにとって本当に有難い事でしょう。（私は若人です）今は冬ですからもちろんガスストーブが入ってます。このストーブを使って、近々湯豆腐祭りをするとか？それともう一つ、我々の研究室には冷蔵庫があります。これは52生の山川氏が寄贈されたものですが、53生に狙われています。黒板には愛の伝言板よろしくいろいろな事が書かれています。

一例一 大山研修の数日後

大山君の~~秘~~写真間にあいません。ごめんして。久美子より

最後に本棚ですが、最上段にはハサミ、ノリ、鉛筆削りなどの文房具。その下にはポットや湯飲みなどで、一番下には、「銀河鉄道999」「麻雀実践教室」などの本が山の様に積まれています。下宿や

自宅で勉強ばかりしている我々にとって、学校に来た時ぐらいマンガでも読んでのんびりしたいですよ。

以上のように、環境の研究室は殺風景で研究室らしくありません。しかし、多数の学生が活発に利用し、いつも明るく笑いが絶えない所です。百聞は一見に如ず。皆さん、一度ぜひ我々の研究室に顔を見せて下さい。特に美人と思ってる人、秀才と思ってる人、麻雀の好きな人、清掃をしてくださる人、環境科学コースでは大歓迎します。（52生 内田）
（注：一月末現在、環境セミナー室として、環境の学生に活発に使用されている。）

環境科学学生研究室（3年）

第2食堂の向かい側、幾人かの学生がいつもタムロしているところ—そこが僕らの環境科学コース学生研究室です。正確に言えばプレハブB棟の1F、体育館側の部屋です。この研究室は本来学生の学習？、休憩の場なのですが、時には生物や化学の学生実験室、またコンパの会場と、多目的に利用されています。通路に面していることもあり、他コースの学生もよく集まってきます。

さてわがコースの学生数は30名、皆あふれる若さとユニークな個性をもつナイス・ガイ、プリティ・ガールばかりです（ほんとかなあ）。研究室の雰囲気は暖かく、のびやかです。2年次の頃は全体的に未だ硬かったのですが、共に過ごすうちに、それぞれの個性がにじみ出てきて、相互理解・親密さが生まれてきました。こう感ずるのは、僕自身がやっと皆の良さに気づき始めたせいかもしれません。クラブ活動で頑張っている人も多く、約半数を占めています。以下列挙してみると、奇跡の火消し男・土江（硬式野球）、恐怖のテニス男・梶谷、塚内（軟式テニス）、歌う一輪の花・中村さん（混成合唱）、ナイーブな山男・野村（美）、知念（ワングル）、詩吟の白土、弓道の二雄・西、西島、優しき主将・野口（空手）、陸上部のカモシカ・東、合気道の女傑・仙波さん、小林寺の前延、などなどです。他にも体育会役員の大久保、バイトで清心高校卓球部コーチの大任を果たしている野村（和）、元ESSで英語に頑張る藤井さんなどがいます。

クラブに所属していない人でも、何かしら打込むものを皆持っているようです。弓道・手芸、読書と幅広くこなす橋本さん、バチンコ徹の田中、ハワイアン・バンドで活躍中の前田、数学・ヨガ・漫画の世界に没入する哲人・大橋、サッカーばか南風原、深遠な人生の哲理を求める田村さん、テニス・サッ

カーに残り少ない青春を賭ける横田など、みんなよう頑張っているという感じ。勉強の方も皆、割と真面目にやっているのではないかと思います。

とにかく、明るく楽しいのが研究室、一度はおいでませ。茶菓子持参大歓迎！(51生 南風原朝彦)



地域文化学生研究室

地域文化コースに属する私は我々の研究室について不満が多い。そのことは私が研究室にあまり出入りしない理由となっているようだ。最初にことわっておくが、私のこの文章を書くのは、私が友人の『飛翔』編集委員と同じアパートに住んでいるためにたまたま頼まれたためによる。従ってこの文章は地域文化コース学生の意見を代表するものではないが、私は平凡な学生だから、研究室に対する代表的な意見の一つになると思う。

地域の学生が利用できる部屋は新館五階の研究室だけで、この一室で約120人の2・3・4年生が“研究”することになっている。日本とかヨーロッパとか地域別の部屋はない。その広さは、教官室二つ分で、その中に本棚がつまっており、空いたスペースに助手用机と学生用テーブル三つとコピー機械があり、ほかのスペースは通路にしか使えない。なんと狭いことか。さらに言えば、きたない部屋なんですよ。それでも二つの研究室には5-10人の学生がダベっていることが多い。利用率10%以下。ほかの学生は一生懸命授業を受けているのでしょうね。きっと。出入りする学生の顔ぶれもほとんど限られていて、他の学生はコピーを作る時にだけ利用するようだ。

この研究室のきたなきの原因は次の通り、まず第一に内部の配置が悪い。利用のしやすさ、美的センス考慮せず。次に整理が不十分。掃除はいつ誰がするのかなあ。いずれにせよ“学生研究室”の主体が部屋に表われていない。それがきたなきの原因のようです。本棚の本は単なる寄せ集め。何を中心に集めたかという主張がない。しかも数も少ない。小学

校の教室の中の図書コーナーの感じ。研究室に行ったら腰を落着かせたくなる雰囲気なんかあったもんじゃない。こんな魅力のない研究室、多くの学生が避けるのは当然。学生数が多い割に魅力がない狭い研究室ということで、おこるはずの問題を解決しているのでしょうね。

私も狭い研究室に不満なのです。120人がくつろげる部屋が必要だと考えます。学生は教室にだけおればいいのでしょうか。教室におれば授業中のことでさらに調べてみたくなることもあるでしょう。授業と関係なしに、疑問なこと知りたいこともあるでしょうよ。その時研究室の本は役に立つと書きたいが、小学校の教室の片隅の図書なんです。図書館・教官室・その他に行かざるを得ない。それも欲しい本がみつかった時はいいのですが。ちょっとしたことを調べる時にはいささかめんどうな気持ち。

日本とかアジアとか地域ごとの研究室があって多くの本が入っているのが望ましいのだが。研究室に本がないのはつまらない。地域文化の本はほとんどが教官室にある。これはおかしいんじゃないの。独占的です。研究室(資料室、あれば)におけば、我々学生の知的関心も少しは増えるし満足されると思う。研究室が狭くて無理ですか。教官室の本だって教官の関心がある本に限られて、学生の関心を十分にカバーできてないようだ。私の属するアジアの場合、中国に偏りすぎている。中央アジア、西アジア、南アジアに関心をもった学生は無視しているのかしら。本ぐらいいはそろえるべき。学生が欲しい本を買い上げる制度はない?地域文化には。

研究室について私のいいたいことは次のこと。学生の多様な関心をカバーできる数多い本をそろえた地域ごとの研究室を設けること。研究室が狭いのは地域文化コースだけのことではない。ほかのコースの学生も同じような不満をもっているようだ。教官室も不足していると思う。プレハブをもう一つたてたら解決できることじゃない?私の要求は不当でしょうか。教官も学生も望んでいることと私は推測しているのですが。私の推測が正しいのであれば、教官側の怠慢か何かを恐れているのだと考えます。また我々学生も自分達・これから入学する学生に無関心過ぎたと考えます。西条移転まで10年近くもあるのですから、いたずらに我慢すべきことではないと思います。(51生 松浦 泉)